

=====  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

=====  
AA 研共同利用・共同研究課題「死の人類学再考：変容する現実の人類学的手法による探究」2022年度第1回研究会(通算第5回)

日時：2022年6月19日(日) 13:30-19:00

場所：AA研マルチメディアセミナー室(306)

13:30-16:00. 加賀谷真梨 「あの世の家の選び方ー夫婦・親子別墓のその後」

16:15-19:00. 「死の人類学事典(仮)」のためのブレインストーミング

要旨

「あの世の家の選び方ー夫婦・親子別墓のその後」

加賀谷真梨

発表者が現在滞在している池間島は、野口武徳が1961年にインテンシブな調査を行い、『沖縄池間島民俗誌(1972)』を出版したことで知られている。同書刊行後、野口は池間島の夫婦・親子別入墓に焦点化した論文を書き、この慣習の特異性を本土の墓制と比較しながら論じた。本発表では、野口が調査した時代から60年経過した現在における池間島の墓制を報告した上で、夫婦・親子別入墓が受容されていた社会文化的背景を検討した。

池間島は令和3年1月の住民基本台帳によると人口521人(男289、女232)、戸数344であり、1992年に池間大橋が開通した後人口減少の一途を辿っている。高齢化率は令和2年度の国勢調査で52.6%である。産業別就業者数は、平成27年度の国勢調査によると、第一次産業84(漁業34、農業50)、第二次産業26、第三次産業106(うち医療・福祉38)人である。1960年代にカツオ漁で栄え、漁港や漁業組合を擁している他、ダイビングショップなど海に携わる仕事に従事する人も多い。

野口の民俗誌によると、ケガによる死人、水死人、自殺者、他村での死者をキガズンと呼び、洗骨を済ませるまでは海岸の洞窟に入れておいたという(野口1972:298)。また、水死体発見者には最大級の祈願が必要とされた。1961年当時、墓はキガズンやアクマ(幼児の死者)を葬る場所、大和墓、家族墓を含めると36か所、それらを除く28か所が共同墓であった(野口1972:299)。共同墓は岸壁に共同で掘った墓で、同じ墓に入るメンバーに血縁関係はなかったという。野口は、大正年間池間の分村である佐良浜でコレラ死者が多く出た時に佐良浜に墓を作った時も父系親族であるから墓を一緒にしようという観念はでてこなかったという伝承を引き合いに出し、親族と墓を結び付ける観念は未発達であると述べる(野口1972:303)。さらに夫婦別入り墓は48世帯(45%)、夫婦同入墓58世帯(55%)と別入り墓の比重が大きく、これは沖縄地域及び本土の墓制や親族組織と比較検

討する際に非常に特徴的な資料を提供してくれると述べる（野口 1972 : 304）。稀有の慣習が見られる背景については、寺院との関連の弱さ、祖霊化の速さ、単系祖先を崇拝する観念の希薄さを指摘する（野口 1972 : 307）。

現在の池間島は、集落の北側の外縁部に、軍人墓（第二次世界大戦後に建立された個人墓）に隣接する形で墓地があり、そこにおよそ 120 基の墓が建立されている。墓地は平成に入った頃に島外出身者がこのエリアの土地を購入し、墓を建立して 1 基 100 万円前後で販売したことに端を発して整備された。墓の建立年をみると平成 2 年（1990 年）以降の年月が刻まれていることから確認できる。現在墓地内部中央に車 1 台分の幅の道路が整備されているが、この道路は自治会が作った。墓地の墓の半数はコンクリート製、半数は大理石など石材を用いたもので、墓には「〇〇家之墓」（中には「〇〇一門之墓」との墓石もある）と記載され、家墓の様相を呈している。

但し、家墓に納められている人は必ずしも父系親族に限定されないようである。ある男性（故人）は長男であったが、父親が早くに亡くなり、また、母親が元家（生家）の家族と金を出し合っただけで墓を作っていたことから、母親の生家の墓に入ったという事例を教示頂いた（2010 年以降の話）。事例はまだ少ないが、近年まで父系氏族の者は同一系統の墓に入らなくてはならない、夫婦は同じ墓に入らなければならないというイデオロギーから一定の距離を置けたことは確かなようである。

この理由について、本発表ではハラウズ（双系親族）が生活の中核をなしてきたため、墓に重きを置かない死生観が育まれてきたため、女性が家庭内の生計中心者として発言力を有していたためという 3 つの側面から解釈を試みた。今後は墓に関する情報を集める一方で、葬制の変化に関しても研究していきたいと考えているが、プライバシーの保護には最大限に留意する。

### 「死の人類学事典（仮）」のためのブレインストーミング

「死の人類学」についての、新たな研究動向と現実社会の動向をふまえて、『死の人類学事典』（仮）の企画のためにブレインストーミングの第 2 回目を行った。今回は、出版社の編集者にも参加していただき、具体化の方向性を探ろうとしたが、いわゆる項目を並べた事典的なものではなく、読者が何を求め、そのためにはどのような形態の本がいいかについて、議論が広がりなかなか収斂することはできなかった。多くの可能性があることがわかったので、今後さらに検討を続けることとした。